9 短歌・俳句

学習目標
- 短歌の原則や、表現技法を覚えよう。
- 俳句の原則や、主な季語、切れ字について確認しよう。

要点のまとめ

●短歌

短歌とは？ 五・七・五・七・七の五句三十一音からなる定型詩。万葉集で最も多く取り上げられた、古くからある和歌の形式の一つ。

短歌の決まりと表現技法

破調（破格）	リズムを崩し印象を強める。 字余り…音数が多い 字足らず…音数が少ない	例 瓶にさす藤の花ぶさみじかければ　たたみの上にとどかざりけり　正岡子規（字余り（六音））
句切れ	途中で意味や調子が切れるところ。	例 ゆふぞらに　みづおとありし　そののちの　永きしづけさ／ゆふがほ咲く　小島ゆかり（詠嘆／四句切れ／初句（第一句）／第二句／第三句／第四句／結句（第五句））
体言止め	末尾を体言（名詞）で止めて、余韻を残す。	例 見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ　何おもふとや夕日の大樹　若山牧水（体言）
倒置	言葉の順序を通常の言い方と変える。	例 金色のちひさき鳥のかたちして　銀杏ちるなり　夕日の岡に　与謝野晶子（倒置）
対句	構成や意味が対応するように言葉を並べる。	例 かにかくに渋民村は恋しかり　おもひでの山　おもひでの川　石川啄木（対句）
反復	同じ言葉を繰り返し、リズムを生む。	例 みちのくの母のいのちを一目見ん　一目みんとぞただにいそげる　斎藤茂吉（反復）
比喩	あるものを他のものにたとえ、生き生きと表現する。	例 日の光金絲雀のごとく顫ふとき　硝子に凭れば人のこひしき　北原白秋（直喩）
押韻	音をそろえて、独特の雰囲気を生み出す方法。	例 ゆく秋の大和の国の薬師寺の　塔の上なる一ひらの雲　佐佐木信綱

枕詞	特定の語句を修飾し、調子を整えたり余韻を添えたりする。 例 あかねさす（「紫」「日」を修飾）　ひさかたの（「光」「天」を修飾）
序詞	ある語句を導き出すための二句以上の修飾語で、調子を整える。
掛詞	一つの言葉に、同音の二つの言葉の意味をもたせる。

※現代短歌ではあまり使用されないものもある。

●俳句

俳句とは？ 五・七・五の三句十七音からなる定型詩。江戸時代に盛んになった「俳諧」が明治時代に「俳句」として確立された。

※表現技法については、短歌の表現技法を参照。

俳句の決まり

- 必ず「季語」を詠み込む。 例 春風や闘志いだきて丘に立つ　高浜虚子（季語／「上五」「中七」「下五」）

季語の例			
春	花曇り・雪残る・雪解け・卒業・蛙・うぐいす・椿・桜	夏	麦の秋・風薫る・梅雨・五月雨・夕立・田植え・若葉
秋	名月・天の川・台風・運動会・七夕・桐一葉	冬	小春・木枯らし・時雨・初霜・落ち葉・寒牡丹
新年	初春・初日・門松・年賀・独楽・初夢・七草がゆ・若菜		

※季節は旧暦によるため、現在の季節感と異なる場合もある。
※新年を分けないこともある。

- 定型でない俳句

自由律俳句	五・七・五の形式にとらわれない
無季俳句	季語を詠み込まない

例 咳をしても一人
例 子が買ひし飴をなめつつふと哀し
※咳をしても…作者　尾崎放哉／子が買ひし…作者　日野草城

- **切れ字**…句の切れ目で調子を整えたり感動を表したりする。

例 をりとりてはらりとおもきすすきかな　飯田蛇笏（「や」「かな」「けり」「よ」などが切れ字）

確認問題

●○○　次の短歌と俳句を読んで、後の問いに答えなさい。

A　はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る　石川啄木

B　垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども　長塚節

C　おさきにというように一樹色づけり池のほとりのしずけき桜　沖なな

D　赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり　正岡子規

E　金剛の露ひとつぶや石の上　川端茅舎

F　向日葵の空かがやけり波の群　水原秋櫻子

G　空をゆく一とかたまりの花吹雪　高野素十

H　入れものが無い両手で受ける　尾崎放哉

(1)　短歌の知識　A～Cから字余りの短歌を一つ選んで記号で答え、その短歌が何句切れかを書きなさい。

短歌［　　］　句切れ［　　］

ポイント　五・七・五・七・七より音数が多いと字余り。句切れは言い切りの形から考える。

(2)　表現技法　――線「垂乳根の」のような言葉を何といいますか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　枕詞　イ　序詞　ウ　掛詞　エ　押韻

ポイント　同じような言葉に「白妙の」「青丹よし」「八雲立つ」などがある。

(3)　表現技法　A・Bの短歌に用いられている表現技法として適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　倒置　イ　対句
ウ　体言止め　エ　反復

A［　　］　B［　　］

ポイント　Aは一行目と二行目の「はたらけど」、Bは第四句と結句の関係に着目する。

(4)　切れ字　D・Eの俳句の切れ字をそれぞれ書きなさい。

D［　　］　E［　　］

ポイント　切れ字になる語は「や」「かな」「けり」「よ」など。Dは下五、Eは中七に着目する。

(5)　季語・季節　F・Gの俳句の季語と季節をそれぞれ書きなさい。

F　季語［　　］　季節［　　］
G　季語［　　］　季節［　　］

ポイント　G…「花吹雪」の「花」とは何の花かを考え、その花の咲く季節を答える。

(6)　俳句の知識　Hの俳句について説明した次の文の［　　］ⓐ～ⓒに当てはまる言葉を、ⓐは五字、ⓑは三字、ⓒは二字で書きなさい。

Hは、俳句の定型の句数・音数である［ⓐ　　］の形式をとっていない。このような俳句を［ⓑ　　］俳句という。また、季語が詠み込まれていないことから、この俳句は［ⓒ　　］俳句である。

ⓐ［　　］　ⓑ［　　］　ⓒ［　　］

ポイント　定型の句数・音数を確認する。季語があり定型であることを表す「有季定型」、季語がなく形式にのっとらないことを表す「無季自由律」という言い方もある。

演習問題

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈岩手改〉

A　秋の蟬たかきに鳴きて愁ひあり　柴田白葉女

B　川越えてしまへば別れ秋の蟬　五所平之助

同じ「秋の蟬」を季語とする句をあげました。「蟬」は夏の季語ですが、秋に入ると法師蟬やひぐらしなどが鳴きます。蟬はもともと、短い命を精一杯鳴くので哀れなイメージがありますが、それでも夏は蟬の数も多く、生命を燃焼させているような力強さが感じられます。しかし、秋に入ると蟬の声もやや衰え、季節の移ろいとともに命のはかなさのほうが感じられるのです。Aの句では「秋の蟬」が「たかきに鳴きて」と捉えられていますが、そこに作者は渾身の命を見ているのです。はかない生を高々と、しかも精一杯生きることの哀れを「愁ひあり」と詠みました。詠まれているのは「秋の蟬」そのものです。

それに対して、Bの句では「川越えてしまへば別れ」であるという思いに対して、「秋の蟬」が※下五に置かれています。※上五・※中七の内容に対して、「秋の蟬」は直接関係ありません。この句は、上五・中七と下五の二つの内容が組み合わされているのです。平之助は映画監督でしたから、この句にもドラマチックな場面が捉えられています。「川越えてしまへば別れ」というのですから、渡し船にでも乗って自分か、あるいは相手が川向こうへ去って行くのでしょう。「川」は別れの象徴。その場面に、ただ蟬が鳴いていたというだけではなく、「秋の蟬」を置くことで、蟬の声とともに、しみじみとした寂しさが伝わります。「秋の蟬」に別れ行く人の切ない心情が託されているのです。別れの場面と秋の蟬に、直接関係はありませんが、「秋の蟬」が絶妙に働いて別れの場面を盛り上げているのです。

このように、季語そのものを詠むAのような方法を「一句一章」とか「一物俳句」、季語と何かを組み合わせるBのような詠み方を、「二句一章」とか「二物俳句」「取り合わせ」と呼びます。

〈井上弘美「俳句上達9つのコツ　じぶんらしい句を詠むために」より〉

（注）下五・上五・中七＝俳句の五・七・五を上から「上五」・「中七」・「下五」と呼ぶ。

---

(1)　季語　A・Bの俳句と同じ季節が詠まれている俳句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　名月や池をめぐりて夜もすがら　松尾芭蕉
イ　菜の花や月は東に日は西に　与謝蕪村
ウ　木枯の果はありけり海の音　池西言水
エ　涼風の曲りくねつて来たりけり　小林一茶

ポイント　「蟬」は夏の季語だが、「秋の蟬」は秋の季語。ア～エは、全て上五に季語がある。各句の季語はア「名月」、イ「菜の花」、ウ「木枯」、エ「涼風」。

(2)　俳句の知識・鑑賞　次の俳句を、文章の内容を踏まえて説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

秋風や模様の違ふ皿二つ　原石鼎

ア　一句一章の俳句であり、「模様の違ふ皿」を二つ並べて対比させることによって、「秋風」という季語が持つもの哀しさを明瞭に写し出している。
イ　一句一章の俳句であり、「模様の違ふ皿二つ」と関連が深い「秋風」という季語を用いることによって、形あるもののはかなさを引き立たせている。
ウ　二句一章の俳句であり、「模様の違ふ皿二つ」とは一見関連のなさそうな「秋風」を詠み込むことによって、もの寂しさを鮮明に描き出している。
エ　二句一章の俳句であり、「秋風」と絶妙に組み合わされた「模様の違ふ皿二つ」を取り上げることによって、「秋風」の冷たさをきわ立たせている。

ポイント　文章の最後の段落で、
「一句一章」…季語そのものを詠む方法
「二句一章」…季語と何かを組み合わせる詠み方
と説明している。まず、この俳句の季語は何か、季語のことだけを詠んでいるか、季語以外のものと組み合わせて詠んでいるかについて確認し、選択肢を四つから二つに絞る。

実戦問題

◆◇◆　次の短歌を読んで、後の問いに答えなさい。　〈福島〉

A　ひぐらしの一つが啼けば二つ啼き山みな声となりて明けゆく　四賀光子

B　八月のまひる音なき刻ありて*瀑布のごとくかがやく階段　真鍋美恵子

C　旅人の耳は澄みけり山行きて秋の光のおと聴くほどに　安田章生

D　*水甕の空ひびきあふ夏つばめ*ものにつかざるこゑごゑやさし　山中智恵子

E　湧き上がりあるいは沈み*オーロラの赤光緑光闇に音なし　秋葉四郎

F　地ひくく咲きて明らけき菊の花音あるごとく冬の日はさす　佐藤佐太郎

（注）瀑布＝滝。
水甕＝水をためる容器。
ものにつかざる＝何ものからも自由な。
オーロラ＝北極や南極に近い地方の空に見られる、帯や幕のような光。

(1)　表現技法・表現理解　直喩を用い、動くはずのない物体を、音と動きがあるかのように表現し、迫るような存在感のある短歌はどれですか。A～Fから一つ選び、記号で答えなさい。　□

(2)　表現理解　目の前に大きく広がる情景を表現することで、動と静の両面をもつ壮大な自然への感動を詠んだ短歌はどれですか。A～Fから一つ選び、記号で答えなさい。　□

(3)　表現技法・鑑賞　次の文章は、A～Fのうちの二つの短歌の鑑賞文です。□ⓐ・ⓑに当てはまる言葉を、ⓐは三字、ⓑは八字で短歌の中からそれぞれ抜き出しなさい。

この短歌は、調子や意味の切れ目が、二句目と三句目の間にあり、はじめに聴覚に関連させて表現したうえで、「□ⓐ□」という視覚で捉える言葉に転じ、さらにもう一度聴覚で捉えたように表現することで、音なきものに音が感じられるかのような情景を想像させている。
また別の短歌では、時間の経過とともに、次第に力強くなってゆく生き物の声によって、それらを取り囲む自然が、まるで量を増して大きくなっていくように感じられる様子が「□ⓑ□」という言葉にいきいきと表現されている。

ⓐ　□

ⓑ　□

ポイント

(1)　「……ようだ」「……（の）ごとく」などを使って、「動くはずのない物体を、音と動きがあるかのように表現」している短歌を探す。

(2)　「大きく広がる情景」というところからまず短歌を絞り、その後で「動と静の両面をもつ」といえるものを選ぶ。

(3)　ⓐ…各短歌を確認し、まず二句切れの短歌を見つける。それから聴覚→視覚→聴覚と表現されているかどうかを確認する。音のないものに音が感じられる短歌を見つけて、二句切れかどうかを確認することもできる。ⓑ…「次第に力強くなってゆく生き物の声」から考える。